

「教養と芸術」第1回研究会

リベラルアーツ——視覚をめぐる諸相

主催：名古屋芸術大学リベラルアーツ総合研究所

会期：2018年1月13日 [土] - 14日 [日]

会場：せんだいメディアテークほか

研究発表要旨

セッション1 (座長 茂登山)

13h10-13h50

・早川知江 | 名古屋芸術大学芸術学部芸術教養領域「絵本と音」

英語を含む西欧言語の音に特徴的な、音節、韻、韻律などの現象は、ことばと音、芸術のつながりを理解する基礎として、教養教育に欠かせない。しかし日本語と英語は根本的に音の仕組みが異なるため、分かりやすく楽しく教えることが難しい。この発表では、音やリズムに工夫が凝らされた絵本を教育に取り入れる実践を紹介し、その有効性や留意点を探る。

13h50-14h30

・水谷仁美 「記憶／記録のかたち——震災から7年をむかえ」（仮）

「3がつ11にちをわすれないためにセンター」の参加者は、技術や経験の有無にかかわらず、震災にまつわる様々なこととがらに向きあい記録を行っている。それらの記録は、震災の状況を直接的に捉えるだけでなく、人びとのつながりや新たな地域文化や価値などを創出する取り組みへと変化しつつある。そうした活動から、震災から7年をむかえる今の記憶／記録のかたちを考察する。

14h30-15h

・竹本圭吾 「東日本大震災からの商店街の復興について」

震災直後の仮設商店街に始まり、中心市街地での商店街や商業施設の再建は、まちの復興のシンボルであり、避難した住民が戻るための重要な契機になっている。岩手県陸前高田市、中小企業庁での経験を元に、東北各地での状況等について概観する。

【休憩】

セッション2 (座長 早川)

15h20-15h50

・荘司陽太 「サービス企画職から見るLINEの本質」

2011年3月11日、日本で発生した震災をきっかけにモバイルメッセージングとして生まれたLINEは、現在“CLOSING THE DISTANCE”というミッションを掲げ様々な事業を展開している。LINEバイト事業におけるサービス企画職の観点から、LINEという企業の本質を見つめる。

15h50-16h20

・稲垣拓也 「集団でのクリエイション—WOWの事例より」

ヴィジュアルデザインスタジオWOWは、CMやVIといった広告分野の映像表現から、様々な展示スペースでのインスタレーション、UI/UXの先行開発、プロダクトまで、ヴィジュアルデザインというコンセプトを中心に据えて多様な作品発表をおこなってきた企業である。本発表では、WOWのデザイナー、プログラマー、プロデューサーなど、多様な専門性を持つメンバーによる、集団での制作手法について、実際の事例をもとに報告する。

16h20-17h

・茂登山清文 | 名古屋芸術大学芸術学部芸術教養領域「教養の図、芸術教養の図」

教養 (artes liberales) には、古代ギリシアに始まる長い歴史がある。そのなかで、ピュタゴラスからプラトンにいたる黎明期、そして七自由学芸が確立したゴシック期においては、幾何学ないしは図への高い関心が見られる。教養と図との関係を概観し、その意味を探る。